



## ■8月6日(金) 全国社会科公民科教育研究会での「入試問題シンポジウム」より

ネットワークからの参加者

新井、篠原、吉田、上原の4名

最初に篠原代表から、入試問題を取り上げた趣旨を説明。典型的な「囚人のディレンマ」の一つが入試問題であることを解きほぐしたいということ。ディレンマより、教師自身も問題であることがわかり、トリレンマかもしれない。昨年はレーティングで終わったが、今年は改善の提言まで行きたいとの発言もされた。

その上で、新井から昨年プロジェクトの総括に関してppを使って説明。

シンポジストの吉田先生からは、当初は、われわれがやっても無駄ではないかとの思いから参加をためらった。しかし、参加してよかったと報告。

上原先生からも同趣旨の発言あり。上原先生は、今年の問題も全体を見渡した総括を述べられた。昨年に比べて、問題は標準化して、冒険心のある問題、悪問は少なくなった印象がある。失われた10年、サブプライム問題、リーマンショックなどが扱われている。

手抜き問題では、用語集をそのまま抜き出した問題を発見した。

篠原代表からは次の意見が出された。①リード文が難しすぎる。だから読まない。質問だけを読んで解答する。だったら作らないほうが良い。②問題のはやり廃りがあるようだ。環境や社会保障の問題は大事だがバランスも欲しい。③早稲田の問題は、先生方の評価が分かれたが、経済学者からは不要な知識を要求している悪問との声が多い。④青山学院の問題は、やはり評価が分かれたが、経済学者は比較的评价している。⑤国際金融の知識問題が多すぎないか。⑥歴史的な内容を問う問題が多すぎないか。

北京の入学問題を紹介し、そのすぐれたとことを指摘した。

吉田先生からは、考えさせることは大事だが、やはり知識は必要で、それへの取り組みも欠かせないという意見がでた。

質疑では、書かせる問題、論述問題をどう指導したらよいかという問が出された。定期テストでの出題、個人的な添削指導などが提案された。

大学への声をどう届けるかに関しては、大学への問い合わせ、メールでの質問などで改善されてきたケースが紹介された。(福岡宗像高校の先生)

入試に政経を入れるべきという意見に関しては、そうなることが望ましいと思うが、もしそうなったらわれわれの授業や指導の方法がどうなるかまでしっかり確認する必要があるとの意見も出された。(東京太田先生)

最後に、入試問題には、①制度の問題、②問題の質の問題、③指導方法の問題と三つの異なった性格の問題があるが、できるところから切り崩してゆきたいとのまとめを新井がおこなった。